

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学校

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	言語学Ⅱ		担当教員	山田 敦士	
			(実務経験)	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 市内大学等にて教員として10年以上勤務。	
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に不可欠な言語学的知識・分析技術の定着を図る				
到達目標	言語学に関する基礎的知識を用い、言語聴覚士として必要な分析ができる				
テキスト・参考図書等	大森孝一他編(2018)『言語聴覚士テキスト第3版』医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60%	期末試験、小テスト(3回実施の予定)、演習への取り組み(評価基準:3主体的に適切な応答ができる 2受け身ではあるが適切な応答ができる 1.応答できない)を合わせて評価する。		
	レポート	%			
	小テスト	30%			
	提出物	%			
その他	10%				
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	前期のおさらい	前期学習内容のおさらい		
	2	意味論(1)	語の意味		
	3	意味論(2)	文の意味		
	4	意味論(3)	日本語のモダリティ		
	5	第2～4回のまとめと復習	意味論の総復習		
	6	語用論(1)	直示・前方照応		
	7	語用論(2)	トピック・コメント・フォーカス・対比		
	8	語用論(3)	敬語		
	9	語用論(4)	ウチとソト		
	10	第6～9回のまとめと復習	語用論の総復習		
	11	文字論	文字種		
	12	言語と言語の関係(1)	言語類型論		
	13	言語と言語の関係(2)	対照言語学		
	14	社会言語学	記述主義と規範主義		
15	第11～14回のまとめと復習	文字論、言語と言語の関係、社会言語学の総復習			

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学校

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	音声学 I		担当教員	山田 敦士		
			(実務経験)	有 <input type="checkbox"/>	無 <input checked="" type="checkbox"/>	市内大学等にて教員として10年以上勤務。
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	一般音声学に関する知識、分析方法を教授する					
到達目標	一般音声学に関する知識を身につけ、日本語音声に対する考察ができるようになる					
テキスト・ 参考図書等	大森孝一他編(2018)『言語聴覚士テキスト第3版』医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	60%	期末試験、小テスト(3回実施の予定)、演習への取り組み(評価基準);3.主体的に適切な応答ができる 2.受け身ではあるが適切な応答ができる 1.応答できない)を合わせて評価する。			
	レポート	%				
	小テスト	30%				
	提出物	%				
その他	10%					
履修上の 留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	ガイダンス	音声学の射程を知る			
	2	音声学の位置づけ	音声学と音韻論			
	3	音声の分類(1)	調音器官			
	4	音声の分類(2)	調音運動の観察			
	5	第1～5回のまとめと復習	調音器官の復習			
	6	音声の分類(3)	IPA			
	7	音声の分類(4)	母音と子音			
	8	音声の分類(5)	子音の分類			
	9	音声の分類(6)	母音の分類			
	10	第6～9回のまとめと復習	IPAの復習			
	11	音の結びつき(1)	音節			
	12	音の結びつき(2)	調音結合と同化			
	13	音の結びつき(3)	音位転換			
	14	音表文字と音声表記	音と文字の関係			
15	第11～14回のまとめと復習	音の結びつき、音表文字と音声表記の復習				

授業科目 (科目ID)	音声学Ⅱ		担当教員	山田 敦士		
			(実務経験)	有 <input type="checkbox"/>	無 <input checked="" type="checkbox"/>	市内大学等にて教員として10年以上勤務。
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	一般音声学に関する知識、分析方法を教授する					
到達目標	一般音声学に関する知識を身につけ、日本語音声に対する考察ができるようになる					
テキスト・ 参考図書等	大森孝一他編(2018)『言語聴覚士テキスト第3版』医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	60%	期末試験、小テスト(3回実施の予定)、演習への取り組み(評価基準);3.主体的に適切な応答ができる 2.受け身ではあるが適切な応答ができる 1.応答できない)を合わせて評価する。			
	レポート	%				
	小テスト	30%				
	提出物	%				
その他	10%					
履修上の 留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	前期のおさらい	前期学習内容のおさらい			
	2	超分節的要素(1)	イントネーション			
	3	超分節的要素(2)	アクセント			
	4	超分節的要素(3)	リズム			
	5	第2～4回のまとめと復習	超分節的要素の復習			
	6	音韻論(1)	弁別素性			
	7	音韻論(2)	音韻規則			
	8	音韻論(3)	音節とモーラ			
	9	日本語の音声(1)	日本語の音素体系、モーラ音素			
	10	第6～9回のまとめと復習	音韻論の復習			
	11	日本語の音声(2)	日本語の母音音声			
	12	日本語の音声(3)	日本語の子音音声			
	13	日本語の音声(4)	アクセント			
	14	日本語の音声(5)	アクセント			
15	第11～14回のまとめと復習	日本語の音声の復習				

授業科目 (科目ID)	音響学		担当教員	高橋 誠		
			(実務経験)	有 <input checked="" type="checkbox"/>	無 <input type="checkbox"/>	工学博士
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	私たちの身の回りは音で満ち溢れている。音は空気の振動という物理的現象であるとともに、情報を伝える信号でもある。この授業では、信号としての音の性質を学び、音がどのように情報を運ぶのか、音と言葉の関係について学ぶ。					
到達目標	・音の物理的な特徴を簡単な実験及び理論で把握理解する ・音の分析とモデル化の基礎を学ぶ ・言語音の生成と知覚について理解する					
テキスト・参考図書等	(教)ゼロからはじめる音響学 著者名:青木 直史 発行所:KS理工学専門書 (参)言語聴覚士の音響学入門 著者名:吉田 友敬 発行所:海文堂					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	85%	定期試験と小テスト、提出物を合わせて評価する。			
	レポート	%				
	小テスト	15%				
	提出物					
その他	%					
履修上の留意事項	授業は基本的に講義形式である。音響学の基礎知識をできるだけ複雑な数式を使わずに学ぶことを目的とした講義であるが、概念を理解するために必要な数式が扱われる。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを説明し、音波の基本的性質(波長、周期、周波数、振幅、位相)を学ぶ。様々な音の種類(純音、高調波、音声)について概観する。			
	2	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを説明し、音波の基本的性質(波長、周期、周波数、振幅、位相)を学ぶ。様々な音の種類(純音、高調波、音声)について概観する。			
	3	および音の物理的な特徴	伝播、反射、干渉、屈折など、音波の振る舞いについて理解する			
	4	音の周波数特性 音圧と音の強さ	デシベルを中心として音の物理的・感覚的な強さや大きさについて解説する。音圧と音の強さの関係について説明し、デシベルの元になる対数についても簡単に勉強しておく学習する。			
	5	音のスペクトル	音の単音成分を表すスペクトルについて学ぶ。スペクトル傾斜、包絡、フーリエ変換、サウンドスペクトログラムなどを概観する。			
	6	音のスペクトル	音の単音成分を表すスペクトルについて学ぶ。スペクトル傾斜、包絡、フーリエ変換、サウンドスペクトログラムなどを概観する。			
	7	伝達関数	音声の生成過程におけるフィルタの役割を理解した上でそれとつながる伝達関数や極と零の概念に取り組む。			
	8	音のデジタル信号処理	どのように音をデジタルデータとして扱うかを学ぶ。標準化と量子化の違いを理解する。			
	9	音声生成の音響理論	音源フィルタ理論を考察する。この理論を用いて音声の共鳴というフィルタ作用がどのように言語音の音響特性の生み出すことを学ぶ。			
	10	日本語音声の音響的な特徴	日本語で使われる母音・子音の音響特性の理解を深める。母音とフォルマント、鼻音とアンチフォルマント、子音とフォルマント遷移について学ぶ。			
	11	聴覚	聴覚を音響的な観点から見て、聴覚フィルタとマスキングについて概観する。			
	12	知覚と認識	ヒトがどのように音の強さ・大きさと高さ、音源位置同定を判断することかを学ぶ。日本語の文節音言語音声や談話を音響的な文節要素(アクセント・イントネーションなど)の知覚についても考察する。			
	13	知覚と認識	ヒトがどのように音の強さ・大きさと高さ、音源位置同定を判断することかを学ぶ。日本語の文節音言語音声や談話を音響的な文節要素(アクセント・イントネーションなど)の知覚についても考察する。			
	14	音声の音響分析	言語音声や談話を音響的な分析する方法を習う。			
15	音声の音響分析	言語音声や談話を音響的な分析する方法を習う。				

授業科目 (科目ID)	言語発達学	担当教員 (実務経験)	箭本 尚子 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として17年勤務。		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語発達の概要を、発達段階や言語機能の諸側面および各機能との関連の観点から学習し、子どもを評価・支援する際に必要な言語発達の基礎知識を得ることを目的とする。				
到達目標	各発達段階の発達を理解する。				
テキスト・ 参考図書等	(教)よくわかる言語発達 著者名:岩立志津男・小椋たみ子 発行所:ミネルヴァ書房 (参)言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学 編者:今泉敏 発行所:医学書院				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60%	定期試験・小テスト・授業内での発表等を合わせて評価する。		
	レポート	40%			
	小テスト				
	提出物				
	その他				
履修上の 留意事項	授業資料、自作ノートなど整理し復習すること				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	言語発達の理論	オリエンテーション、言語発達の理論について		
	2	前言語期の発達①	音韻知覚		
	3	前言語期の発達②	前言語コミュニケーション		
	4	前言語期の発達③	感覚・触運動機能、発声行動		
	5	前言語期の発達④	認知機能の発達		
	6	幼児期の発達①	初語の出現と語彙の増加		
	7	幼児期の発達②	語彙・構文の発達		
	8	幼児期の発達③	談話能力の発達		
	9	幼児期の発達④	音韻意識の発達		
	10	学童期の発達①	読み書き能力の発達		
	11	学童期の発達②	語彙・構文の発達		
	12	学童期の発達③	談話能力の発達		
	13	言語発達に影響を及ぼす様々な因子①	言語発達やコミュニケーションの発達に課題を引き起こしうる障害(ASD、MR他)		
	14	言語発達に影響を及ぼす様々な因子②	学習障害・特異的言語障害		
15	言語発達の評価・支援	事例検討			

授業科目 (科目ID)	リハビリテーション概論		担当教員 (実務経験)	阿部 由美 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 言語聴覚士として市内病院にて14年、訪問看護ステーションにて4年勤務	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必須	単位数 1
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数 30
授業目的	リハビリテーションと障害に関する理論を理解し、実際の教育・医療・福祉現場、および地域におけるリハビリテーションの進め方を学ぶ				
到達目標	教育・医療・福祉現場、および地域におけるリハビリテーションの役割、言語聴覚士の役割を理解する				
テキスト・参考図書等	(教)PT・OT・ST・ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論 改訂第3版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90%	定期試験、小テストにて評価を行う		
	レポート	%			
	小テスト	10%			
	提出物	%			
その他	%				
履修上の留意事項	言語聴覚療法はリハビリテーションの一領域である。リハビリテーションの概論に基づいてグローバルな視点で言語聴覚療法を組み立てる重要性について学ぶ				
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーションと機能訓練の違い	リハビリテーションの歴史・定義・目的について		
	2	医療・保健・社会福祉とリハビリテーションの関わり方	リハビリテーションの領域		
	3	リハビリテーションマインド	障害を診る心		
	4	疾患と障害の関係	ICIDHとICF(特にICIDHについて)		
	5	疾患と障害の関係	ICIDHとICF(特にICFについて)		
	6	疾患と障害の関係	ICIDHとICF(特にICFについて)		
	7	リハビリテーションの過程	リハビリテーションの領域		
	8	リハビリテーションの過程	評価に基づくプログラム立案を概観		
	9	リハビリテーションの過程	事例を通してICIDHを具体的に考える		
	10	リハビリテーションの過程	事例をと通してICFを具体的に考える		
	11	リハビリテーションの過程	事例をと通してICFを具体的に考える		
	12	医学的リハビリテーションの各段階	チームアプローチについて		
	13	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際(主に急性期)		
	14	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際(主に回復期)		
15	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際(主に生活期)			

授業科目 (科目ID)	言語聴覚障害学概論 I		担当教員 (実務経験)	佐々木 勇輝 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年間勤務		
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚療士の仕事内容、考え方を知り、言語聴覚士とは何かを理解する。					
到達目標	医療従事者としての心構えを理解できる。 言語聴覚士がどのような仕事なのかを知り、言語聴覚士として働く自分をイメージすることができる。					
テキスト・ 参考図書等	(教)言語聴覚士テキスト 第3版 著者名:大森孝一他 発行所:医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	%	レポート、小テスト、提出物で評価を行う。			
	レポート	30%				
	小テスト	30%				
	提出物	40%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	「言語聴覚士」・「医療人」としての仕事を深く理解するための重要な科目なので意欲をもって参加すること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	言語聴覚士とは	言語聴覚士の役割、働く場を知る。 言語聴覚士になるために必要な臨床実習、国家試験などを知る。			
	2	医療従事者としての言語聴覚士	医療従事者としての心構えを理解する。			
	3	言語聴覚障害学総論	言語聴覚士の歴史と現状について学ぶ。			
	4	言語聴覚療法の実際	グループワークにおいて、 病期別の評価・診断の目的・訓練、他職種連携について学ぶ。			
	5	言語聴覚士の仕事①(成人)	言語聴覚士の仕事について先輩STから話を聞く。			
	6	言語聴覚士の仕事②(小児)	言語聴覚士の仕事について先輩STから話を聞く。			
	7	コミュニケーションについて	本質、目的、構成要素、ノンバーバルコミュニケーション			
	8	言語聴覚士と倫理	業務と倫理、パターナリズム、インフォームドコンセント等			
	9	理学療法士の仕事	理学療法士の仕事を知る。言語聴覚士との関係について知る。			
	10	作業療法士の仕事	作業療法士の仕事を知る。言語聴覚士との関係について知る。			
	11	臨床実習にむけての準備	臨床実習に向かううえでの心構え、姿勢について学ぶ。 ケースレポート・サマリー・発表スライドの作り方について学ぶ。			
	12	国家試験関係	国家試験について、解き方、現在学習している内容がどう結びついていくかを学ぶ。			
	13	国家試験関係	国家試験問題を解く。解説作り。			
	14	言語聴覚療法について	言語聴覚療法の基礎について振り返る。			
15	言語聴覚療法について	言語聴覚療法について振り返る。				

授業科目 (科目ID)	失語症 I		担当教員 (実務経験)	北風 祐子 道内病院で言語聴覚士として20年以上勤務し、養成校にて15年以上勤務		
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	2単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	20回	時間数	40時間
授業目的	失語症についての定義、知識を習得し、失語症古典的分類におけるそれぞれの特徴を把握し鑑別する。					
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・脳の基本構造と言語中枢について理解する ・失語症の定義について説明できる ・失語症の原因疾患と症状について理解する ・失語症の各タイプの特徴を説明できる 					
テキスト・参考図書等	(教)失語症臨床標準テキスト 医歯薬出版株式会社 (教)病気がみえるvol.7 脳・神経 第2版 (参)言語聴覚士テキスト 第3版 医歯薬出版株式会社					
評価方法・評価基準		評価割合(%)	評価基準			
	試験	100%	定期試験で評価を行う			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の留意事項	古典的失語症分類においてグループワークを実施します。積極的に参加して確実な知識を身につけること。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	オリエンテーション	この科目の目的、学習の仕方について			
	2	大脳の機能解剖(1)	脳全体の構造			
	3	大脳の機能解剖(2)	前頭葉、側頭葉			
	4	大脳の機能解剖(3)	頭頂葉、後頭葉、基底核と視床			
	5	脳の機能とこころ	記憶、学習、感情、ことば			
	6	失語症とは何かを知る	失語症の定義、失語症研究の歴史、原因疾患、病巣について学び、失語症という障害を概観する			
	7	失語症とは何かを知る	失語症の定義、失語症研究の歴史、原因疾患、病巣について学び、失語症という障害を概観する			
	8	失語症状①聴覚的理解の症状	聴覚的理解の症状として出現する、語音認知、語の意味理解、構文の理解、聴覚的把持力について学ぶ。			
	9	失語症状②発話面の症状・復唱の症状	喚語困難、迂言、保続、錯語、ジャルゴン、構文の障害、再帰性発話、発語失行(失構音)、非流暢などの症状について学ぶ。復唱については、聴覚認知ー把持・処理ー発話のステップを含む復唱の障害機序を学ぶ。			
	10	失語症状②発話面の症状・復唱の症状	喚語困難、迂言、保続、錯語、ジャルゴン、構文の障害、再帰性発話、発語失行(失構音)、非流暢などの症状について学ぶ。復唱については、聴覚認知ー把持・処理ー発話のステップを含む復唱の障害機序を学ぶ。			
	11	失語症状③読み書きの症状	仮名と漢字の違い、音読と読解の違い、錯読、自発書字と書き取りの違い、錯書などについて学ぶ。			
	12	失語症状④その他の失語症	数字と計算の障害もよく観察される。また、無言、保続、反復言語、視野障害など失語症に随伴しやすい症状について学ぶ。			
	13	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。			
	14	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。			
15	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。				

履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容
	16	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。
	17	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。
	18	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。
	19	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。
	20	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。

授業科目 (科目ID)	失語症演習 I		担当教員 (実務経験)	阿部 由美 言語聴覚士として市内病院にて14年勤務、訪問看護ステーションにて4年勤務		
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚療法の基本的な考え方・情報収集と評価の診断の技法を習得する。					
到達目標	標準失語症検査(SLTA)の評価手技を習得する					
テキスト・ 参考図書等	適宜、資料を配布。(参)言語聴覚療法 臨床マニュアル 改訂第3版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験(筆記/実技)80%、小テスト10%、提出物10%にて評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	10%				
	提出物	10%				
その他	%					
履修上の 留意事項	pa-sennto					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	言語聴覚療法とは	標準失語症検査(SLTA)について			
	2	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	3	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	4	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	5	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	6	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	7	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	8	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	9	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	10	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	11	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	12	標準失語症検査、(SLTA)	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ			
	13	SLTA報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方			
	14	SLTA報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方			
15	SLTA報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方				

授業科目 (科目ID)	高次脳機能障害 I		担当教員	松山 大輔		
			(実務経験)	有 <input checked="" type="checkbox"/>	無 <input type="checkbox"/>	道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	高次脳機能障害について各症状とその発生メカニズム、評価、リハビリテーションについて基本的な知識を学ぶ					
到達目標	・各種高次脳機能障害について理解および説明ができる					
テキスト・ 参考図書等	(教)標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版 発行所:医学書院 (教)高次脳機能障害ポケットマニュアル 第3版 著者名:原寛美 発行所:医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験および提出物にて評価を行う。			
	レポート	%				
	小テスト	%				
	提出物	20%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	高次脳機能障害は「見えない障害」と呼ばれ、障害は多岐にわたる。毎回しっかり復習すること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	高次脳機能障害とは	高次脳機能障害の概要について学ぶ			
	2	失行	失行のタイプやメカニズムについて学ぶ			
	3	失行	失行のタイプやメカニズムについて学ぶ			
	4	失認	失認のタイプやメカニズムについて学ぶ			
	5	半盲と半側空間無視	半盲と半側空間無視の違いやメカニズムについて学ぶ			
	6	記憶障害	記憶の種類とその障害、メカニズムについて学ぶ			
	7	注意障害	注意機能とは何か、注意障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ			
	8	注意障害	注意機能とは何か、注意障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ			
	9	遂行機能障害	遂行機能とは何か、遂行機能障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ			
	10	認知症	認知症のタイプやメカニズム、中核症状と行動心理症状について学ぶ			
	11	外傷性高次脳機能障害	外傷性高次脳機能障害の特徴、問題点、リハビリや社会資源について学ぶ			
	12	脳の部位からみた高次脳機能障害	各症状と脳の機能との関係を復習する			
	13	事例検討	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ			
	14	事例検討	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ			
15	事例検討	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ				